

馬場法子作曲「ハゴロモ・スイート」作品解説

世界各地に伝来する天女伝説の中でも、突出して特異で美しい構成を持つ世阿弥*の「羽衣」。
今作は、この能楽作品から4つの光景を切り取り、漁師の集う浜の喧騒、松風、長絹の衣摺れなど様々な現象を音に乗せながら再構築された、僅か10分の《オペラ》である。

I. 風早の、三保の浦曲を漕ぐ舟の、浦人騒ぐ波路かな

三保の松原に住む漁夫とその仲間達が、肩に釣竿を担ぎながら浦にやってくる。
松の枝に掛かった美しい衣を見つけた漁師達は、それを持ち帰って家宝にしようと言い出す。

II. 呼掛なう

すると天女が現れ声を掛ける；
「もうし、その衣は私の物です。どうしてお持ちになるのですか。それは天人の羽衣とって、たやすく人間に与える物ではありません。もとの通りお置きなさい。悲しいことに羽衣が無くては飛行の方法もなく、天上に帰ることも叶わないでしょう。どうか返してくださいませ」
漁夫は天女の嘆く姿を哀れみ、舞を舞って見せてくれるならば、と言って羽衣を返すことにする。

III. La valse ラ・ヴァルス（ワルツ）

喜んだ天女は「君が代は、天の羽衣が稀に地上に舞い降りて、羽衣でいくら撫でてでも尽きぬことのない巖のような限りない長さであって欲しい」と詠いながら舞う。笙・笛・琴・豎琴など様々な楽器の音色が孤雲の上に響き渡り、まるで極楽世界のようにであった。夕日は須弥山のように辺りの山を赤く染め、松の緑は波に映え、愛鷹山麓を吹き払う嵐によって花が降り散る。あたたかも雪の上を白雲を巡らすかのごとく袖を翻して舞う、天人の舞姿のなんと美しいことか。

IV. 左右左、左右颯々の

天女が左右左右颯々と舞うと、花を髪に挿した天人の羽衣の袖が、風になびく様子も返す様子も、みな美しい舞の袖となる。そうこうするうちに時は過ぎ、羽衣は浦風に棚引き、やがて彼方の富士山へ舞い上がり、霞に紛れて消えていった。

解説：馬場法子

*作者諸説あり

参照『羽衣 対訳でたのしむ』三宅晶子 著 檜書店